

利尻山山岳環境史の再構築への試み

佐藤雅彦（利尻町）

はじめに

ここ十数年で利尻山の山岳環境は大きな変化を遂げつつあります。しかし、そのあまりにも早すぎる変化の流れの中であって、私たちはこれらの変化を正確に次の世代に受け渡すことができるだろうかという不安におちいることがあります。登山道荒廃の問題が表出した折り、私たちは比較すべき過去の資料がほとんどないことに愕然としました。同じ過ちを次の世代にさせない為にも、現在進行形の出来事を私たちは正確に記録し、残していく努力を続ける必要があるものと筆者は信じます。

本稿では、近年利尻山で課題となっている「山のトイレ問題」（＝登山者の尿尿によって悪臭やティッシュの散乱、トイレ場への踏み分け道の増加、尿尿による周辺環境への影響懸念など）と「登山道荒廃問題」（＝登山道やその周辺における山体崩壊による登山道の危険性の増加、登山道の拡大、およびそれらにともなった裸地化、植生後退などの諸問題）の面から着目した利尻山の長い歴史を、既存の文献などから概略を記すとともに、近年の状況を手元の資料などからまとめ、振り返ることを試みます。多くの内容は年数がさかのぼるほどに不明瞭となり、今後、より詳細な聞き取りや文献調査が必要になるかと思われますが、利尻山の山岳環境の背景と現況を概観するガイド的な一文として、本誌読者のみなさまのお役に立てればと思います。

また、本稿をきっかけに、願わくばかつて利尻山を訪れた読者のみなさまから筆者の知らない新旧の利尻登山や当時の山岳環境の状況などのご記憶をお伝えいただくことができれば、たいへんうれしく思います。誤りや訂正のご指摘などもぜひお寄せいただければ幸いです。

最後になりましたが、本稿を書く機会を与えてくださった永田京子さん、そして一人一人のお名前を出すことはできませんが、様々な時代に利尻山の山岳環境の状況を大変な苦労のもとで記録し、今日、私たちが検証するに足りうる材料を与えてくださった多くの先輩諸氏に心から感謝をすると同時に、つたない文章ではありますが本稿を捧げたいと思います。

利尻山の形成

山がなければ、山岳環境の問題は起こりません。そのため、まずは利尻山の形成から簡単に本稿を始めたいと思います。

石塚（1999）によると、利尻火山の形成は約 20 万年前に活動が開始されたと考えられています。詳細は省きますが、その活動は前期、中期、後期にわけられ、前期では「下部成層火山体」「長官山成層火山体」などにより標高が約 1300m ほどの山が、中期には現在のほとんどの利尻山を構成する「主成層火山体」が標高 1800 m に達したと推定されています。これらの山体形成に関する年代については前期が約 6.7 万年前、中期は約 4.2 万年前という測定結果が得られています（石塚、1999）。後期では、山腹から広範囲に渡る溶岩が流れ出たり、現在、ポン山と呼ばれているいくつかのスコリア丘などを麓に形成するなど様々な変化に富む活動が起こりました。山頂からは現在のロウソク岩が火道と推定される野塚溶岩類が流れ、この溶岩流直下から採取された木片の分析から約 2.8 万年前という年代が推定されています（三浦・高岡、1993）。その後、『利尻火山の比較的規模の大きい活動は 7000-8000 年前頃には終了し、その後の小規

模な側噴火活動も数千年前には終息した』と考えられており(石塚、1999)、活動の終息とともに、山体の浸食がよい本格的に開始することとなりました。

同火山は成層火山として位置づけられ、溶岩流と火山砕屑物がタマネギの中身のように互い違いに層を成すことが登山道上からも確認できます。いわゆるガレ場といわれている部分は、火山礫などのこれら火山砕屑物が地表に現れ、崩れている場所にあたります。さらに利尻山は高緯度に位置することから、凍結融解による崩壊も進みやすいそうです(石塚私信)。さらに近年、近藤(2004)は鬼脇の豊仙沢における氷河地形について詳細な調査を実施し、およそ4万年前から2.4万年前までの間に3回の氷河拡大期があったと推定しています。氷河の存在は利尻山の浸食にも少なからぬ役割を果たしていたことが想像されます。

明治から昭和初期まで

山岳環境問題は人が存在して初めて認識できるものです。次に利尻山に登りはじめた私たち人間の歴史を振り返ってみましょう。

もっとも古い利尻登山の記録はいつぐらいのことなのでしょう?これについては、寛政4年(1792年)7月の最上徳内から始まる登山史について西谷(2000)がこれまでの記録をまとめています。古い伝承をのぞけば、頂上に到達したという文献上の確実な記録は、日食・気象観測の為に登頂したという北海道庁内務部の観測隊員たちによるもので、明治29年(1896年)のこととされます。ただし当時既に山頂には祠があり、これを立てた行者の伝承が時雨(1948)には書かれていますが、年代やその詳細については諸説があり、不明とされています(西谷、2000)。

明治29年の観測結果や動植物についての記述は『利尻山観測記 全』(明治30年・1897年)にまとめられており、この観測日記には、『東方ノ半腹崩壊地少シク動ク午後八時複タ崩壊ト共ニ地動ヲ感ス』という興味深い記述があります。今から約100年前においても利尻山の崩壊は今日と同様、確実に進んでいたのでしょう。またこの中には『島民ノ登山スルモノ少ナカラサリシモ』という記述があるため、既にこの頃、信仰登山などで地元民は山に登ることがあったようです。植物学者の牧野富太郎も明治36年に植物採集のため登頂していますが、『島の人に尋ねても、利尻山は信心にて詣る人が日帰りに登る丈けのことで、道も素より悪いし、山上に泊まるべき小屋などのある譯もないとのことで、・・・』と詳しい山の状況を聞くことができなかったと紀行文に書いています(牧野、1906)。

このように明治から大正にあっては、利尻山を一般の人が登山目的で訪れることはあまりなかったようです。しかし、大正から昭和の初期までの間に、登山ルートが次々と確立されていったことも事実です。前述の観測隊員が利用したリヤウシナイからのルートは現在の鴛泊ルートに新設・変更され(年代は不明、大正15年以前と推定されている<西谷、2000>)、鬼脇ルートは大正12年(1923年)に(時雨、1948)、杓形ルートは昭和13年(1938年)に開通の記述が見られ(小田桐、1964)、大正末期から昭和の初めにかけて、登山を含めた利尻島観光への積極的な活動が行われたものと思われます。ちなみに大正12年には、北海道三景(小樽新聞社)の第一位に「利尻富士」が選ばれています。このことは観光客が実際に来ていたかどうかは別として、少なくとも風光明媚なその景色が道内に広く知れ渡っていたことを示す出来事だったと言えます。

登山道の確立やその背景にあった観光の動きは、昭和5年(1930年)の小樽新聞・北日本汽船株式会社共催の「利尻島見学及利尻富士登山」を実現させました。本事業は利尻山が大人数の観光登山の対象として位置づけられた最初の事業だったのではないかと思います。ところが、約300名ほどが鬼脇から頂上を目指したという前代未聞のこの歴史的なイベントは、集団食中毒の発生により死者までも出すことと

なり、惨憺たる結果としてもその名を歴史にとどめることになったのです（利尻富士町史編纂委員会、1998；利尻町史、2000）。

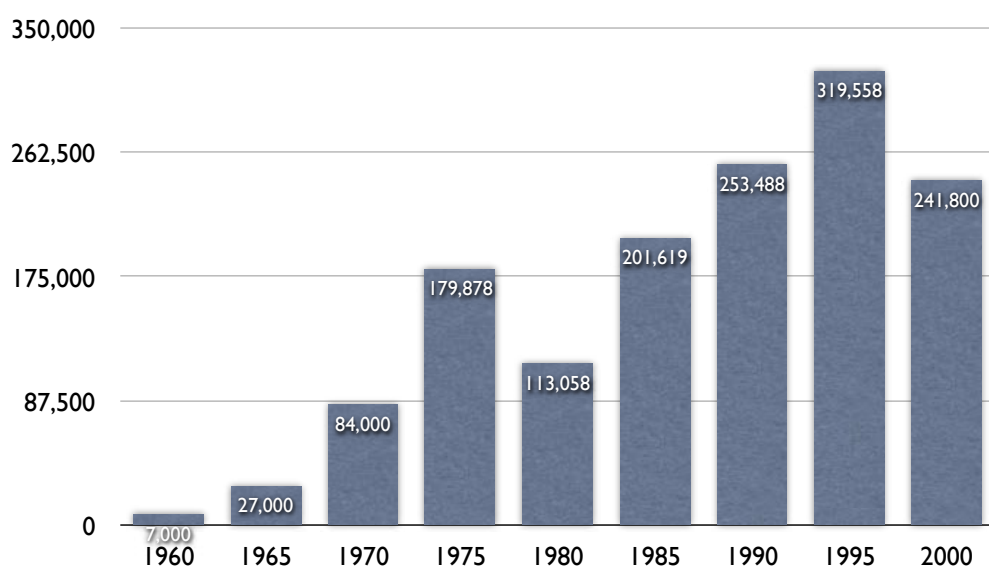
戦後から昭和後期まで

戦後から昭和 40 年代までの利尻に多くの登山者が押し寄せたという具体的な記録を筆者はあまり知りません。以下、数少ない資料から当時の登山事情を追ってみたいと思います。

昭和 25 年（1950 年）に「利尻礼文道立自然公園」の指定があり、島内から出された陳情書などの文書内に観光や登山道の状況が記されている部分があります（利尻町史編纂委員会、2000）。たとえば、昭和 29 年（1954 年）の「利礼道立公園施設整備に関する陳情書」では、『利尻山登山口と云いば鴛泊口に屈指するも過言でなく登山者の三分の二はこの道を登っている状態であります。然しながら本登山口は融雪期に於ける流水により年々損傷を受けこのまゝでは最も容易な道路さえ専門家以外の登山は困難な状況に立至ると思えますので（後略）』と、既に鴛泊ルートが代表的な一般登山道となり、さらに現在でも課題となっている流水などによる登山道の損傷があったことが伺い知れます。杓形ルートについては利尻町から出された陳情書（昭和 31 年・1956 年）に、『（前略）近年頃に観光のため来島する登山者が増加するに伴いその利用度も倍加されるに至り町経済にもたらす恩恵も少ないものがありますので（後略）』の記述があり、この時代では既に登山客を主体とした少なからぬ観光客が来島し、観光産業を地元が強く意識するようになっていたようです。ちなみに利尻島はニシン漁で栄えた場所としても有名ですが、北海道の春ニシン大漁時代は昭和 33 年（1958 年）に終焉を迎えたとされ（水島・鳥澤、2003）、観光産業への注目も高まった時代だったのでしょう。

グラフ1

利尻島の観光客入り込み数の変化



＊利尻町史（2000）および利尻町産業振興課提供の数値による

この時代、日本隊によるマナスル初登頂（昭和 31 年・1956 年）や「日本百名山」（深田久弥、昭和 39 年・1964 年）の出版などが相次ぎ、昭和 30 ～ 40 年頃にかけての第一次登山ブームがあったとされ、登山者たちが利尻を目指すことも少なくなかったはずです。そんな記述がどこかにないかと探していたところ、昭和 41 年（1966 年）に発行された山岳雑誌を見つけました。北海道特集とされたその号には、『七月の声をきくと、各地で山開きが行われ、多くの登山者がつめかけ、中頃になると休暇で来道する道外の学生群をも加え、とりわけ大雪、利尻、知床などは大賑わいを展開する。この現象もここ数年のことで、（後略）』とあり、昭和 30 年代の後半になって利尻に訪れる登山客が急に増加してきたことが伺われます（阿部、1966）。しかし、この時代に登山客がいくら多くなったからといっても、現在のようなトイレ問題や登山道の荒廃が起きるほどの利用があったとは思えません。というのも、昭和 40 年代にかつて利尻山に登られた方のお話では、季節にもよるかと思いますが、登山客に会うことがほとんどなかったとお聞きしたことがあるからです。

その後、道立公園に続き「利尻・礼文国定公園」（昭和 40 年・1965 年）、更に「利尻礼文サロベツ国立公園」（昭和 49 年・1974 年）の指定を受け、近年の離島ブームや第二次登山ブームなども加わり、観光・登山で島を訪れる人は昭和 55 年（1980 年）頃から加速度的に増加していくこととなったのでした（グラフ 1）。

昭和の後半における登山道の状況としては、まず、昭和 47 年（1972 年）には杓形市街から見返台園地までの車道が旭川陸上自衛隊第二施設隊の協力で完成し（西谷、2000）、杓形ルートへのアクセスが非常に楽になったことが特筆されます。これによって従来の市街地からの道は旧登山道と呼ばれることとなります。なお、杓形旧登山道の再整備は 2004 年、鴛泊旧登山道については 2005 年に行われ、どちらも森林の中を行く快適な散策路として蘇りました。

昭和 61 年（1986 年）発行の「利尻礼文サロベツ国立公園管理計画書」には、利尻登山の 3 コースについての状況の記述があります（利尻町史編纂委員会、2000）。まず、当時、全国の山での共通の課題でもあったゴミ問題として「ゴミ持ち帰り運動」の推進が管理方針のひとつとしてあげられていますが、山での尿尿問題などの記述はまだありません。コースごとの状況については、鴛泊コースでは『頂上付近は、滑落の危険がある』とされ、鬼脇コースは利用者は多くないものの危険箇所への対処が、そして杓形コースでは『三眺山と鴛泊登山線合流地点の間は、落石や滑落のおそれがある』と記述されています。この計画書では登山道の浸食や崩壊の兆しはあるものの、登山道そのものを整備しなくてはならない差し迫った状況は感じられず、まだ案内板設置などによる登山者の注意喚起により安全性を確保できる状態であったと考えられます。

昭和後期から平成へ

国立公園が指定され、観光客の入込み数が急激に 20 ～ 30 万人へと増加していったのは、昭和 55 年（1980 年）頃からでした（グラフ 1）。2000 年の携帯トイレの無償配布が利尻山山岳環境史の大きな転換点であると考え、昭和 45 年（1970 年）から平成 12 年（2000 年）までの 30 年間は、山岳環境の激変の時代と位置づけることができ、極めて重要な期間であると思われます。

確かにこれまでの過去の記述でも、利尻山の自然崩壊や登山道の浸食などの記述はいくつか見かけることができました。しかし、現在の私たちがいだいている「山に登ることもためらわれるような」山体や登山道の荒廃はなかったように思えます。これらの荒廃はもちろん自然崩壊の現象といえる面もありますが、ほとんど利用がない鬼脇ルートと比較をすると、そこには現在の鴛泊・杓形ルートに見られるような裸地化、登山道の深い浸食などは見当たらず、登山者数の増加と山体の荒廃の関係は密接に関係しているように思

われたからです。そのため、観光客の入込み数が激増した時代に、山の荒廃問題も大きな変化をみせたのではないかと予想されます。また、山のトイレ問題はあきらかに登山者数の増加に伴って起きてきた問題であり、利尻島への観光客の入込み数が激増したこの期間に問題が顕著になったものとみてよいでしょう。

ところが、この山岳環境史上、様々な変化が起きたと考えられるこれらの30年間については、比較的最近の時代であるにも関わらず「なにが起きたのか」についての具体的な資料がほとんどないように感じられます。文書に書き留め、歴史に残すにはあまりにも新しい時代である一方、人々の記憶が不鮮明になるほどに古くなりつつある時代、それがこの昭和45年(1970年)から平成12年(2000年)までの30年間とも言えましょう。

しかし、幸いなことに、昭和63年(1988年)からパークボランティアとして利尻島に夏の間来島し、様々な自然解説や環境保護活動に携わってこられた宮本敬之助さん(愛知県)の覚書が利尻町立博物館に保管されていました。この覚書には、利尻山で確認された生物名の他、山岳環境についての記述も多く、当時の山でどんなことが起き、問題になっていたのかを年を追って知ることができました。

以下、ご本人の許可を得て、「ゴミ」「トイレ」「登山道荒廃」の3つの視点から覚書をたどってみることで、その問題がどのように顕著になってきたのか、時代の変化を概観したいと思います(以下『』内はすべて宮本さんの記述の引用です)。

まず、「ゴミ持ち帰り運動」に代表される山中に投捨てられるゴミについては、平成3年(1991年)には『日本の山としては比較的キレイの部にあると思う』とされ、登山者の意識も高く、山にゴミを捨てていけないことが既にマナーとして定着してきていたことがわかります。その一方で鴛泊避難小屋やその周辺に埋められたゴミの担ぎおろしは平成6年(1994年)まで毎年続けられています。現在でも旧鴛泊避難小屋跡の地面からは古い空き缶などのゴミが地表に現れ続けており、その撤収をボランティアとともに継続して行っています。これらの缶のラベルの古さからすると、少なくとも昭和40～50年以前のもものと推測され、かなり量が多いことから、埋められた当時は山で出たゴミは地面に埋めることが習慣化していたのかもしれませんが。利尻山のゴミ問題が顕著になり問題化したという記録は今のところありませんが、もしあったとしても1970年代から1990年までの話ではないかと想像されました。平成7年(1995年)には宮本さんも『山も含めてゴミは非常に甚少ない』と述べ、利尻山におけるゴミの問題は解消されつつあったことがわかります。

次に、山でのトイレ問題に関係した記述を探すと、既に平成2年(1990年)に『石碑より先は黄金街道で長官山ならぬ黄金山である』とあり、現在もトイレ場として使われ続けている長官山の突端部が当時から登山者の糞尿で汚されていたことがわかります。平成5年(1993年)には避難小屋周辺のゴミ、および糞尿がひどいことを述べるとともに、山中で目立つ、いわゆる「ティッシュの花」についても初めて言及がありました。平成6年(1994年)からはパークボランティアなどによるスライド上映会がミニビジターセンター(杓形岬公園)において夏の間のみ実施され、上映会の最後には必ず、せめて水溶性であるトイレットペーパーを山中のトイレでは利用していただくように呼びかけがされるようにもなりました。4年前の平成2年(1990年)には『登山者の意識の向上の故が数年前より格段とよくなった』とあったものが、この平成6年(1994年)には『登山者は激増している。それに比例して質も低下している』との記述があり、登山者が急増し、マナーの低下がおきた時期でもあることが伺えます。

利尻山のトイレ場は身体が隠れる平坦地がなかなかないため、ある程度場所が限定されます。これらのトイレ場の存在もいつから使われるようになったのか、汚れがひどくなったのか、などの記録が残っているものはほとんどありませんが、平成6年(1994年)には山頂直下の岩の下、平成8年(1996年)では鴛泊旧登山道の甘露泉側の入口附近がトイレ場となっている記述がありました。

平成10年(1998年)にはますますトイレの問題が顕著となり、宿泊登山が屎尿の放置を助長している

という観点から、登山者への呼びかけも、トイレトペーパーの利用推奨から日帰り登山への推奨へと活動が推移し始めています。

平成12年(2000年)に携帯トイレ無償配布が始まり、平成13年(2001年)には携帯トイレ専用トイレブースも登山コースに設置されますが、この年には使用済み携帯トイレの放置や投捨て、ブース利用のマナー低下などの問題が指摘されています。宮本さんはこの年にハードの整備とともに利用者の意識を変えるソフト面の充実をもすべきだと提言しています。

以上の記述などから、トイレ問題は1990年代初めに既に問題が指摘され、登山客の増加とともに顕著となり、とうとう平成12年(2000年)の携帯トイレ無償配布への対策につながったものと思われます。なお観光客の入込み数は平成8年(1996年)のピーク後(36万人)、一旦20万代に落ち込みますが、トイレ問題がそれに比例して治まったという記述はなく、登山客数の変化が観光入込み数とは独立に動いている面も伺えました。

「登山道荒廃」についての記述は、平成5年(1993年)に『杓形コースの合流点より上部は年々荒廃して蟻地獄と名付けてもおかしくない現状である』と最初の記述がみられるようになります。しかし、1994-1995年と特別の記述はなく、平成8年(1996年)になって合流点上部について『10年前に比してすくなくとも3倍は路巾が広がってしまい益々歩きにくくなっている』と書かれています。この合流点上部の浸食については利尻における登山道崩壊問題における最もシンボリックな場所であり(写真1、以下「合流点ガレ場」、年代は不明ですが、昔(少なくとも1970年中頃以前と思われる)はV字型に浸食されたこの場所の上、つまり浸食以前の登山道を歩いたという話を複数の方からお聞きすることがあります。さらに、宮本さんが利尻に来島した1988年の時点でのご記憶を語っていただいたところ、この場所の浸食はこれほどひどくはなく、地表の植生をながめることができる程度の浸食の深さしかなかったとのことでした。また、同じ時期、この「合流点ガレ場」の直上部も現在のような深く幅広い浸食を持った2つのルートは存在せず(写真2)、単純な狭い一本の登山道であり、その後、浸食を避けるように雄忠志内側の風衝草原(写真左側)

写真1. 鷲泊コース(左側)と杓形コース(右側)の合流点。
写真右の大きな岩から左に目を移していくとくさびのようにえぐれている部分があり、この深く浸食された部分が頂上への道となっている。写真2. 写真1を登りきるとこの場所に出る。ももとの道は右側にしかなかったが、歩きにくくなったため、写真左側の植生を削りながら登山道が拡大してしまったらしい。



に迂回路が作られるようになったそうです。これらのことから、1980年から1990年中頃までの約10-15年で顕著な変化がこの場所におきたのではないかと推測されますが、浸食前の年代がわかる証拠写真がないため、今後、より詳しい検証が必要と思われます。

平成16年(2004年)より、浸食した登山道に周辺の火山礫を詰めた土嚢を積み、ステップを確保する試みが利尻町で行われるようになりました。この場所は鴛泊コースとの合流点直下の杓形コースの最後の部分であり、かつてはリシリリンドウやエゾコザクラが咲き乱れる風衝草原でした(以下、「合流点直下の杓形側のガレ場」)。しかし、いつの間にか複数の登山路が植生の合間を縫ってつけられるようになり、そこを雨水などが流れ浸食を加速させ、現在では草原を縦断するように浸食された火山礫がむき出しとなった溝や踏み分け道が複数見られるようになっていきます。この場所がいつからこのように荒廃してしまったのかも、はっきりとした記録はありませんが、宮本さんの覚書に平成10年(1998年)8月に杓形コース下山中に誤って親不知子不知を降りてしまい遭難した男性の事件が記されています。宮本さんはなぜこの男性が迷ってしまったのか理由を知りたいと思い、翌日に同じルートをたどりますが、親不知子不知の入口から迷い込んだのではなく、既に合流点直下のこの場所から登山道を見失い迷い込んだようだと言っています。本当の理由は今となってはわかりませんが、宮本さんが想像したように、合流点から親不知子不知までのルートが荒廃しており、うっかりすればルートを間違える危険性があったことは確かで、この年には既に浸食もかなり進んでいたものと考えられました。この年以降の記録は平成13年(2001年)しかないのですが、その年も『合流点まで親不知から、特に荒れがひどい』と記述があり、杓形コースの親不知子不知以降のルートの崩壊を指摘しています。この部分の崩壊については、以前から落石の危険が多いとされていた「親不知子不知」の区間とあわせて、「親不知子不知」の終点から前述の「合流点直下の杓形側のガレ場」までの道も新たに崩れはじめた現象を指摘したものと思われます。

平成、そして未来へ

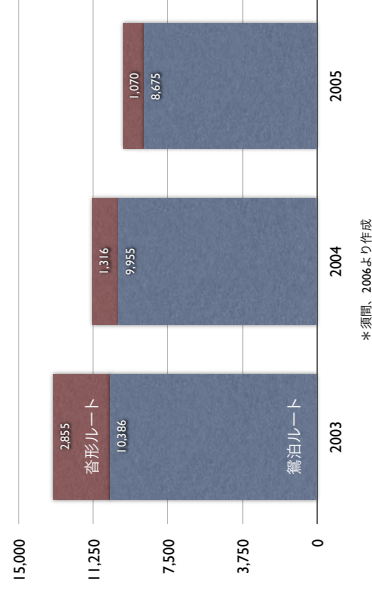
利尻山の山岳環境史でもっとも大きなターニングポイントとなったのは、利尻町、利尻富士町による携帯トイレの無償配布実施の年となった平成12年(2000年)であると前述しました。この年以降、様々な対策が行政を中心にして行われ、山のトイレや登山者数の状況などについて詳細な記録が残されるようになりました。須間(2004、2005、2006)では具体的な数値が丁寧にまとめられ公表されており、ここではこれらの報告の数字をもとに、ここ3年間の利尻山の現況を示す3つのグラフを作成し、紹介してみたいと思います。

まず最初は、登山者数の推移(グラフ2)についてです。登山者数は平成15年(2003年)～平成17年(2005年)で1万人前後で減少の傾向が認められます。また杓形コースの利用は非常に少なく、平成17年(2005年)では全体の約1割程度となっています。この原因としては、杓形コースがもともと初心者コースでないことや、近年のルートの崩壊の状況などから島内でも登山者の安全を考慮して、自分の力量に見合ったルート選択についてのアドバイスを積極的に実施していることも影響しているのではないかと考えられます。

次に平成17年(2005年)の月別の登山者数の変化(グラフ3)ですが、7月が最も登山者数が多く、6月から8月までの利用が全体の約9割を占めています。これは花の時期と夏休み期間、そして早い秋の訪れなどが影響しているものと考えられます。なお、これらの統計に使われている赤外線カウンターですが、2002年に鴛泊ポン山と鴛泊ルートの分岐から鴛泊ルートに約10mほど進んだ場所に北海道大学園芸緑地学講座によって設置されたものが、利尻山最初のものとなりました。乗富(2004)ではこの器械を使った調査や現地調査により、登山者数、登山道の荒廃の現況と登山者の意識調査が詳細にまとめられてい

グラフ2

利尻山登山者推計数の変化



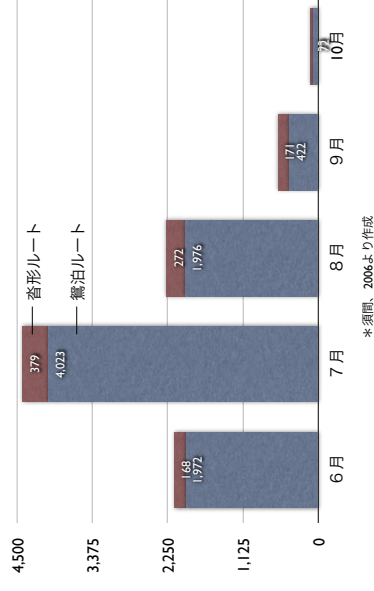
グラフ4

使用済み携帯トイレの回収率 (%)



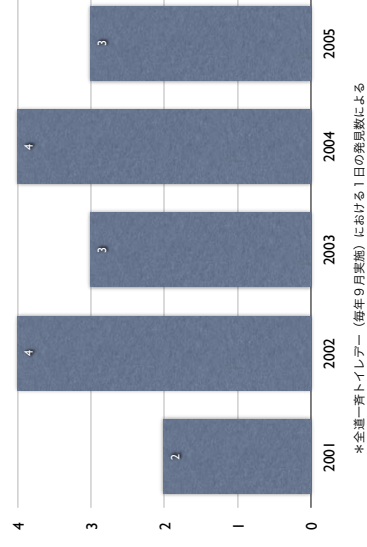
グラフ3

月別の変化 (2005年)



グラフ5

投捨て携帯トイレの回収数



ます。

グラフ4は使用済み携帯トイレの回収率についてです。無償配布が始まった当初は回収率が低かったものの、現在では約2〜3割が使われていることがわかります。それでは、回収されなかった携帯トイレはどうなっているのでしょうか？未使用の携帯トイレのうち9%（平成17年度・2005年度）は返却されていますが（須間、2006）、残りの9割以上のものは登山者によって「おみやげ」として持ち帰られていることが想像されます。しかし、一部の心無い登山者によっては、使用済みとなった携帯トイレを山中に投捨ててきてしまっていることも依然続いているようです。この問題は無償配布が始まった年からの大きな問題のひとつとしてとりあげられてきました。須間（2006）では、『平成11年度以前のような避難小屋周辺や登山道脇に排泄物やティッシュが散乱している状況は年々減少傾向にあり』とされており、携帯トイレ導入は利尻山の環境保全に大きな成果をみせつつあります。その一方で携帯トイレの投捨てという新たな問題も生じ、「全道一斉山のトイレデー」（山のトイレを考える会利尻支部およびパークボランティアの会共催）における放置された携帯トイレの回収数をみると（グラフ5）、決して登山者のマナーがよくなってきていると安心できる状態ではありません。携帯トイレの無償配布は平成17年（2005年）で終了し、いよいよ平成18年（2006年）のシーズンから400円での有償配布が実施されます（須間、2006）。山のゴミは持ち帰るというマナーが定着した今、今度は、自分の責任で自分の排泄物を山に残さないように配慮することが登山者に求められる時代となってきたわけです。今後、利尻山の環境保全は登山者の気持ちにまさにゆだねられることとなり、私たちの気持ちひとつで、山を汚くも美しくもできる岐路に立たされたと言えます。

トイレ問題については、無償配布、専用トイレブースの設置、有償配布へと次々と施策がされてきましたが、登山道の荒廃についても近年動きがありました。まず、前述のとおり、2004年より「合流点直下の杓形側のガレ場」に土嚢積みがされるようになりました。この効果として、1）登山道を登山者がはずれることがなくなった、2）土嚢をステップとして使う為、登山道を崩すことが少なくなったこと、があげられ、登山者たちにも登りやすいと好評のようです。しかし、利用する登山者数が極めて少ない杓形ルートでさえ、土嚢が破れるのに早いものでは2年もかからず、小まめなメンテナンスが必要とされています。さらに平成17年（2005年）6月には、『登山道及び関連施設の維持管理並びに周辺環境の保全に努めることを目的とした利尻山登山道等維持管理連絡協議会』が発足しました（須間、2006）。この協議会は両町や宗谷森林管理所、環境省、宗谷支庁などの他、民間団体も参加しており、今後は利尻の山岳環境における様々な課題が検討される予定となっています。

おわりに

以上、駆け足で利尻山の山岳環境史を振り返ってみましたが、利尻山に人が登るようになり、たかだか約100年しか経っていないにもかかわらず、いろいろな思いを持った人が利尻山に登り、また登らずとも山を思い、そして、山もそれにともなって急激に変貌しつつあることに深い感慨と驚きを持ちました。また、冒頭でも述べましたが、地元に住む私たちにも「山はいつまでもそのままの山の姿であり続ける」という油断（それはもしかしたら我々の願いだったのかもしれませんが）があり、変わりゆくありのままの山から目を背けていた時代もあったことに反省の念を抱かざるを得ません。「心はかたし 身は強し あおげば清き 利尻富士」と歌われたのは利尻小学校の校歌でした。たしかに麓から眺める利尻山はいまでも「あおげば清き」存在です。しかし、私たちはなにが山で起きているのかを今後もしっかり見つめ続ける必要があるとともに、失われつつある過去、そして現在の記録をきちんと後世に伝えていく責任があります。恥ずべきことも、誇れるべきことも、なにも言わない利尻山とともに・・・。

参考文献

- 阿部 淳, 1966. 夏の北海道山地の特徴. 岳人, (224): 24-27.
- 北海道廳内務部, 1897. 利尻山観測記 全. 北海道廳内務部農商課, 59 pp. 秀英舎, 東京.
- 石塚吉浩, 1999. 北海道北部, 利尻火山の形成史. 火山, 44(1):23-40.
- 近藤玲介, 2004. 北海道北部、利尻山豊仙沢の氷河地形と石英を用いた氷河堆積物の OSL 年代測定. 駿台史学, (123): 113-128.
- 牧野富太郎, 1906. 利尻山と其植物. 山岳, 1(2): 25-36.
- 三浦英樹・高岡貞夫, 1993. 利尻火山から噴出した溶岩流に埋没する木材遺体の 14C 年代と樹種同定の意義. 第四紀研究, (32): 107-114.
- 水島敏博・島澤 雅(監修), 2003. 漁業生物図鑑 新 北のさかなたち. 645 pp. 北海道新聞社, 札幌.
- 西谷栄治, 2000. 利尻山登山史と利尻山に関する記録. pp. 843-852. 利尻町史編纂委員会(編纂), 利尻町史 通史編. 利尻町. ぎょうせい.
- 小田桐清美, 1964. 島の風土記 利尻・礼文. 267 pp. 岩橋印刷, 札幌.
- 利尻町史編纂委員会, 2000. 利尻町史 通史編. 利尻町. 1162 pp. ぎょうせい.
- 利尻富士町史編纂委員会, 1998. 利尻富士町史. 利尻富士町. 1583 pp. ぎょうせい.
- 時雨音羽, 1948. 島物がたり. 606 pp. 宗谷観光協会.
- 須間 豊, 2003. 利尻山における携帯トイレブース設置にかかわる問題点とこれからの課題. 第4回山のトイレを考えるフォーラム<資料集>, 山とのトイレを考える会(編). pp19-28. 山のトイレを考える会. 札幌.
- 須間 豊, 2004. 利尻山携帯トイレの取り組みについて. 第5回山のトイレを考えるフォーラム<資料集>, 山とのトイレを考える会(編). pp43-48. 山のトイレを考える会. 札幌.
- 須間 豊, 2005. 利尻山のトイレ対策について. 第6回山のトイレを考えるフォーラム<資料集>, 山とのトイレを考える会(編). pp24-37. 山のトイレを考える会. 札幌.
- 須間 豊, 2006. 利尻山のトイレ対策について. 第7回山のトイレを考えるフォーラム<資料集>, 山とのトイレを考える会(編). pp44-50. 山のトイレを考える会. 札幌.

(〒 097-0401 北海道利尻郡利尻町杓形字栄浜 142、dolicho@d1.dion.ne.jp)

「追記文」

本報文は、筆者(佐藤雅彦氏)と発行者(永田京子氏)の了解を得て「和賀川水系だより第52号」より転載したものである。